

図書館だより

No. 21

●電子化と図書館

..... 図書館長 理工学部教授 大槻 東巳

●教えて! ソフィアンくん

～ 第4回 図書館のこと、どのくらい知ってる? ～

●グループ学習室が新しくなりました

●～図書館利用者アンケートへのご協力ありがとうございました～

●図書選定委員お薦めの本 総合人間科学部社会福祉学科 横井 葉子 助教

●豆知識 「文庫」について



電子化と図書館

図書館長 理工学部教授

大槻 東巳



グーテンベルクが印刷機を発明して6世紀がたつ。その間、出版の形式はほとんど変化していなかったが、ここ20年ほどで劇的に変化した。コンピュータとインターネットの発達のためである。発明された当時は数値計算の道具であったコンピュータが、この20年は数値計算以外の分野で積極的に使われている。車の自動走行、OCR、音声認識システムなどにコンピュータが使われており、出版の世界も電子入稿、自動校閲など大きく変わっている(こうして書いている文章もMicrosoft Wordに「てにをは」を直されている。小学生のころから進歩していない)。これは第2の印刷革命である。こうした技術発展が大学図書館におよぼしている影響を、個人的な体験をもとに考えてみたい。

まず、図書館を利用したい人がどのように本にたどり着くかを考えてみる。私が書籍を借りる場合、OPACを使って検索し、目的の本の請求記号をメモに書き写して図書館に向かい、目的の本にかろうじてたどり着く。この請求記号をメモに書き写すというのがヒューマンエラーをまねくとともに、もし本がない場合にレファレンスカウンターに聞きに行く際にも十分な情報がなく、本のタイトルや著者名もうろ覚えでカウンターの人を困らせてしまう。スマートフォンなどで検索するにもインターフェースが古いので老眼に易しくない(学生はOPAC検索で出てきた画面をカメラで撮るそうだが、やはり私には文字が小さい)。この流れは改善の余地がありそうである。

一方、学術誌の記事を探して読む場合、最近図書館に行く機会がほとんどない。同僚には単に研究に行き詰まっているだけと言われそうだが、そもそも学術論文がオンライン化されて、図書館に論文を読みに行きコピーする必要がないと言い訳したい。たまたに図書館

が購読していない雑誌の論文を読む必要に駆られるが、これもarXiv*1などのプレプリントサーバーや各大学の図書館リポジトリなどで間に合うことが多い。

さて、このように便利になった環境であるが、大きな問題がある。目的の書籍・論文に直接行けてしまうので、その周りの書籍や論文に目もくれなくなり、結果として良書や関連分野の論文を偶然見つけるという機会がなくなってしまうのだ*2。解決策としてOPACが「書庫のこちら辺です」とか、Web of Scienceが「このリンクの当たり」というような曖昧な表示をする機能をつければ良いが、おそらく誰も使わないだろう。問題は現代社会が効率性を求めすぎることとあり、こればかりは検索機能の小手先の変更では解決できない。

図書館の機能として、データベース検索や、研究成果の情報発信も重要である。以前は紙ベースであったが、情報技術の発達によってこれも様変わりしている。高額のデータベースが無料のサービス(例えばGoogle Scholar)と比べてどういう優位性があるか、見極める必要がある。また、図書館リポジトリの意義も情報技術の発達によって絶えず変わっていくと思われる。最近の、学術誌のオープンアクセス*3の動きとそれに対する図書館の関わりなども見逃せない。

総合メディアセンター長を4年前に辞めて、ネコとの共同生活を始めた。帰宅するとすり寄ってきて膝の上で寝てしまうので、その状態で2時間ほど本や論文を読む。場合によっては申請書や論文の査読も行う。いずれにしろ、参考文献や関連情報を調べなくてはならず、図書館のデータベース、電子ジャーナルを頻繁に利用していた。また、昨年は日本物理学会理事会の刊行委員長として、電子ジャーナルの出版・運営に携わってきた。図書館長となり、これまでと立場を異にするが、よりよい学術情報の供給と発信をめざすことで、お世話になってきた図書館に恩返しが出来ればと思う。

*1 arXivとは主に数学、物理学、計量科学の論文のプレプリントを登録するサイトで、100万件程度の論文が登録されている。物理から金融界に転出して成功した人の寄付で運営されている。

*2 同様の問題はニュースのオンライン化でも顕著である。どんな重要な記事でも小さい記事でも1行の見出しで表示されるので、そのニュースの重要性が一目で分からないのである。また自分の知りたいニュースばかり追ってしまい、知らなければいけないニュースが漏れてしまうという問題もある。

*3 論文著者の投稿料等により出版され、インターネットを通じて無料公開されるもの。



教えて! Q&A ソフィアンくん



～ 第4回 図書館のこと、どのくらい知ってる? ～

「教えて! ソフィアンくん」のコーナーが始まって、早いもので今回で4回目になりました。これまで、図書館に関するいろんなことを紹介してきましたが、みんなどのくらい覚えてくれたかな? そこで今回は、これまで紹介したことをクイズにしてみました。
全問正解者には記念品をプレゼント! ぜひ、挑戦してみてね。



図書館クイズ

- Q.1 資料の探し方の相談にのってくれるのは、どこですか?
1. 貸出カウンター 2. レファレンスカウンター 3. 学習支援席
- Q.2 理工系の資料はどこにありますか? _____ 階
- Q.3 オンラインサービスでできることを一つあげてください。
- Q.4 上智大学の蔵書を検索するデータベース名は次のどれですか?
1.OPAC 2.CiNii 3.NDL-OPAC
- Q.5 『上智の100年』という資料の中央図書館での配架場所と請求記号を教えてください。
配架場所: _____ 請求記号: _____



応募先

答えがわかった人は、件名に「ソフィアンくんクイズ」、本文に所属、学生番号、氏名、連絡先、クイズの答えを明記の上、lib-info@sophia.ac.jpまで、メールで応募してね。全問正解者には、おって連絡するよ。

皆さんからの
たくさん応募を
待ってます!

「教えて! ソフィアンくん」のコーナーでは、このコーナーで取り上げてほしい、図書館に関する質問を募集しています。図書館に関することで、僕に質問がある人は、件名に「教えて! ソフィアンくん」、本文に所属、学生番号、氏名、連絡先、質問内容を明記の上、lib-info@sophia.ac.jpまで、メールで応募してね。



グループ学習室が新しくなりました



壁一面がホワイトボードの部屋、プロジェクター完備の部屋、机自体がホワイトボードになっている部屋など、3種類の違うタイプの部屋になりました。



予約は従来通り、入口のボードに記入するだけ。新しくなったグループ学習室を、おおいに活用してください。

～図書館利用者アンケートへのご協力ありがとうございました～

昨年11月に実施させていただいたアンケートに多くの方からご回答をいただきました。ご協力に心より感謝いたします。アンケート結果は間もなく、上智大学図書館ホームページ上で公開する予定です。

本館の所蔵資料については、概ね、「満足」及び「普通」が「不満」を上回る結果となっております。今後も引き続き、利用者の皆様の研究や勉学に役立つ資料を揃えることに努めてまいりたいと思います。

また、今回のアンケート結果を通して、授業の予習・復習、レポート・論文作成、試験準備、といった勉強の場として多くの方が図書館を利用されていることも分かりました。各階の閲覧席以外にも、本年4月にリニューアルオープンしたグループ学習室やラーニング・コモンズといった学習スペースも積極的にご利用いただきたいと思います。

その一方で、利用者のマナーでは「私語」や「席取り」といった課題があらためて浮き彫りにもなりました。利用者が心地よく研究・学習できるように、マナー改善に向けて注意喚起をこれからも続けていきたいと思っています。

今後も、皆様のご理解とご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

図書選定委員お薦めの本

総合人間科学部社会福祉学科 助教 横井 葉子

■『創造の方法学』(高根正昭著・1979年 講談社現代新書)

>> 学部地下1階 080:Ko196:v.553

私は1984年に社会福祉学科を卒業し、長く社会福祉の仕事に従事した後、2008年に社会福祉学専攻の博士前期課程に入学しました。入学した当時、自分が経験してきた現場実践の世界と研究によって生み出される理論の二つの世界を往復することの大変さに気づき、気の遠くなるような思いがしたものです。しかし、研究法の授業を通じて、その往復こそが研究の楽しさであることを知るようになりました。



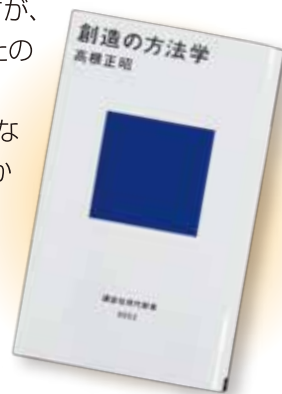
上智の社会福祉学専攻では、研究法基礎演習の授業が必修となっています。輪講形式で行われるこの授業で、最初に紹介された課題図書の中の一冊がこの本です。私がこれを図書館だよりで推薦するのは、研究を始めたばかりの大学院生や卒論を控えた学部生に、ぜひこの本を手にとってほしいからです。この本には、「理論と現実の間の、あるいは抽象と経験的世界との間の、循環の過程」(194ページより引用)である、知的活動の過程が初心者到大変わかりやすく書いてあると思うのです。

「あとがき」にもあるとおり、この本は社会科学の方法論について書かれた入門書です。「知的創造とは何か」を論じた章ではじまり、「方法論の一般理論へ」と題した章で締め括られています。ご覧のとおり地味な新書で、初版も1979年と古く、「これ一冊で足りる」とはとてもいえないでしょう。しかし、「記述」と「説明」のちがいが、「概念」、「定義」、「変数」、「因果関係」とは何かといった最も基本的なことが具体例やエピソード付きで(しかも必ず英語表記を添えて)書かれており、ヴェーバー、デュルケム、トクヴィルなどの有名な著作を扱いながら、実験法、数量的研究法、質的研究法への入り口を体系立てて説き明かしてくれるよさがあります。

著者は1931年生まれの社会学者です。日本で平和運動とマスコミュニケーションの研究に従事して1963年にアメリカに渡り、スタンフォード大学のコミュニケーション学部で修士号を取得しました。その後、カリフォルニア大学バークレイ校の社会学部で数量的研究を学んで博士論文を著し、教職に就き、1973年に帰国。上智大学国際部比較文化学科(当時)の教授として、英語と日本語で理論と方法論の授業を担当したとのこと。そして、授業のための教科書としてこの本を著し、2年後の1981年に50歳の若さで亡くなりました。平和運動に挫折した「昭和一桁生まれ」の若者がアメリカで研究者として独り立ちするまでのライフヒストリーとしても面白く、著者が接した1960年代のアメリカ西海岸の文化や大学の様子、学界のできごとが描かれ、タルコット・パーソンズ、ポール・ラザーズフェルド、マーガレット・ミードなど著名な学者にまつわるエピソードがたくさん出てくるのもこの本の魅力です。(個人的なことですが、私は偶然著者と同じ時期にバークレイに住んで子ども時代を過ごし、著者が上智大学におられたのと同時期に社会福祉学科の学生だったので、特別な親しみをこの本に感じています。)

著者は、結びに「およそ方法論とは、科学の原理を表現するための、文法のようなものではないか」と書いています。そして、この文法のような「必要最低限のルール」を身につけて、だれかのコピーではない、「自分自身の文章」を書くことを読者に呼びかけています。その呼びかけは、時代を越えて読者の心を打ちます。

自分の足元を固め、前を向かせてくれる本だと思います。



豆知識

『文庫』について

「文庫」とは和語の「ふみくら」に漢字をあてた語で、本来は、文献・文書・記録類を保存した書庫です。転じて、まとまった蔵書や図書館を指します。北条家の金沢文庫、徳川家の紅葉山文庫、加賀前田家の尊経閣文庫、近代では静嘉堂文庫、東洋文庫などが著名です。また出版形態を指す語として叢書や全集の類の総称として明治期から用いられた(例：帝国文庫、日本文庫)。現在では、小型で携帯に便利な廉価な普及本の総称として用いられています(例：岩波文庫)。

上智大学中央図書館では「岩波文庫」や「中公文庫」をはじめ数多くの文庫を所蔵しています。お気に入りの一冊がきっと見つかります。お気軽にお立ち寄りください。

中央図書館では文庫は主に地下1階中央の木製の書架に配架されています。

出典：図書館情報学用語辞典(請求記号Ref:010.33:To724:2013)

叡智が世界をつなぐ

上智大学
SOPHIA UNIVERSITY

上智大学図書館だより No. 21

発行所 上智大学図書館
〒102-8554
東京都千代田区紀尾井町 7-1
TEL: 03-3238-3510
FAX: 03-3238-3139
発行日 2015年7月1日
印刷 三鈴印刷株式会社
TEL: 03-5276-0811